【エッセイ】

いただかせたがる日本人

――言語時評・五――

工藤力男

参議院議員の普通選挙が終わった。地方自治体の議会選挙ほどではないが、今回も、選挙カーや政見放送で、決まり文句「よろしくご支援賜わりますよう、心からお願い申し上げます」をさんざん聞かされた。この「賜わる」について考えてみたい。

新横浜駅を利用することの多いわたしが毎度接する奇妙な言語表現がある。このたぐいは国じゅうに溢れているので、多くの利用者はほとんど意に介していないだろうが、七月末に書き留めたのは左記のとおりであった。列車の到着時刻が近づくと、プラットフォームに「毎度ご利用いただきましてありがとうございます云々」という、録音らしい女性の声が流れた。一方、車内放送の車掌の声は「毎度ご利用くださいまして云々」であった。全く同じ文脈なのに、片や「いただく」、片や「くださる」である。この鉄道会社では、この二つの語は同等の表現価値を有するらしい。車内の電光ニュース板には「毎度ご利用くださいまして」の文字が流れ、イヤフォンの貸出しについて「ご利用いただけます」と出る。ちなみに、「ご利用いただけます」は小田急の放送でも掲示でも頻繁に用いる。冒頭に引いた「賜わる」は「いただく」の同義語なので、この文脈で乗客が主格になる行為に「賜わる」を用いるのは、じつは己

れを敬う表現なのである。

現在の日本で使われている「いただく」は、おおよそ誤用が七割、的確な使用が一割、その他が境界域にあると言えるだろう。先年、わたしは「日本語練習帳・続貂」（『成城国文学』十九号［2003］）にそう書いて病根の深さを指摘した。次に二つの用例を引くが、その前者を『日本国語大辞典』第二版が例文に挙げ、後者を大野晋氏が『日本語練習帳』に的確例として挙げたもので、ともに誤用である。

御はかまを忘れましたので、御送り申上ましたが御うけとり戴きました事と存じ升。（志賀直哉『痴情』）

ほんの子供ですから、駅長さんからよく教えてやっていただいて。（川端康成『雪国』）

傍線部の敬語表現を常態語に直すと、前者は「うけとってもらった」、後者は「駅長さんからよく教えてやってもらって」となる。「やる」と「もらう」は行為の方向が正反対の動詞なので、それを一緒に用いることの奇怪さが、敬語に覆われて気付かれなかったのだ。この混乱の原因は何だろうか。

本稿の冒頭に引いた、選挙カーの放つ「賜わる」は、日常の卑近な会話にはめったに現われず、口答でも書面でも専ら改まったときに用いられる。その意味で、これは準口語ないし準文語とでも言うべき語である。だから、人は自分が日常用いる日本語の語法を適用させずに平気なのではなかろうか。ほとんどの日本人が、高等学校の古典の時間に「給ふ」「給はる」の違いを教わるのだが、それを現実の生活に結び付けて考える習慣をもたないに違いない。

謙譲語「給はる」を、このように尊敬語として用いる先駆例は鎌倉時代に現われた。室町時代、その用法は急速に広がり、江戸時代の擬古文にも受け継がれた。本居宣長はそれを嘆いて『玉あられ』で次のように書いた。いま現代語に試訳して掲げる。

「給ふ」は与える人について言う語、「給はる」は受ける人について言う語である。【「給ふ」は話し言葉の「くれる、とらす、下さる」などに当たり、「給はる」は「もらふ、いただく、拝領する」などに当たる。】（中略）古い書物には、「給はる」を「被レ賜ハ」などと書いてある。それなのに、今、世の人にはこの区別がなく、「給ふ」ことを「給はる」と通じさせて言うのは誤りである。

明治期に流れこんだこの語の状況を『新潮現代国語辞典』［1985］に見よう。

たまわる ㊀「もらう」「受ける」意の謙譲語で、与える人を敬って受ける人の動作にいう。いただく。頂戴する。〔ヘボン〕 ㊁「くれる」「与える」「授ける」意の尊敬語。上位者の動作にいう。下さる。〔ヘボン〕「飜訳の代に、旅費さへ添へて―・りしを〔舞姫〕」

『舞姫』は文語文で書かれているので直接の参考にならない。そこで、〔ヘボン〕として引かれた箇所の記述を、J.C. Hepburn『和英語林集成』［1886］の原文について見ると、

TAMAWARI, -RU タマハル 賜 t.v. To give,—spoken only of most honorable persons; also, to receive from a superior. Syn. ATAERU, SAZUKERU.

とあって、この語の敬語用法の混乱ぶりをよく捉えている。かくて「たまわる」に尊敬語の座を追われた「たまう」は、現代日本語では少し横柄な命令表現「～たまえ」という局限された用法に残るに過ぎない。

このように、「たまう」と「たまわる」の混同の事実を指摘した人は多いが、この現象の生じた原因に言及した論著には、まだ接したことがない。今この短文で詳細な論証を呈示することはできないが、おおよその見通しだけは着けておきたい。

金田一春彦「日本語はどういう言葉か」（大修館書店『日本語講座』第一巻［1976］）に日本語教室の興味ある光景が描かれている。それを摘要して記す。

以前教えた事項について知っているか否かを尋ねると、学生たちから「先週、あなたはそれを私に教えたから、私はそれを知っています」という答えが返ってきてギョッとさせられる。確かにそうなのだが、この答えの前半を聞くと、「おかげで迷惑しました」とでも続きそうに思う。日本人なら、「先週教わりました」か「先週教えていただきました」と答えるだろう。

ここには日本語をめぐる二つの問題が露呈している。氏がギョッとしたのは、条件句の「教えた」と「から」ゆえである。近年、「から」「ので」「て」を使い分けない、外国人並の日本語運用力の日本人が殖えているので、これも興味ある対象だが、今回は言及しない。当面の問題を解く鍵は、金田一氏の言う後半にある。すなわち、ある行為によ

ってことがらが実現したとき、行為者を取り立てては表現せず、それを受けた者の行為として表現するところに、日本的な敬語表現の要諦があるということである。行為者が何かをしたようには表現しない、自然可能が根本義である助動詞「る／らる」が尊敬表現をになう道理である。この教室の例では、教えた教師の行為としてではなく、教わった学生の行為として表現されるべきなのだ。冒頭に挙げた例に当てはめると、「たまう」た人の行為よりも「たまわっ」た人の行為として述べるほうが丁寧だという意識が、かかる形式を選ばせているのだ、とわたしは考える。

敬語表現が発達したことで、行為者を一々言わなくてもよいのが日本的な表現であった。日本語史は敬語表現簡素化の歴史であったと言うことができる。かつて「奉り給ふ」の形で謙譲と尊敬を重ねた表現を、現代語は一方で済ますように変わった。そこに行為者と被行為者の紛れやすい原因があったように見える。そこで、格を明示する表現が発達したのであった。現代語でその骨格を示すと、「（わたしが）していただく」「（あなたが）してくださる」と言うべきなのに、格表示する肝心の語句（括弧内）を省くところに誤用が生まれるのである。

七月廿四日、ラジオのハングル講座で接した興味ある例を示そう。要請表現の例文に付せられた「していただければありがたく存じます」とある対訳文を、講師は「してくだされば……」と説明し、別の例文「していただくわけにはいきませんでしょうか」の傍線部を「くださる」とも読み替えたのである。原文には朝鮮語の尊敬の補助語幹「si」があるだけなので、直訳はともに「くださったら」が適当なのに、「いただく」を用いた訳文を掲げているのだ。ここにも日本人のいただき好きが覗いているようだ。

「たまわる」「いただく」が尊敬と謙譲の用法間で混同されたのには、いま一つの原因がある、とわたしは考える。手元にある最新の資料、国立国語研究所『方言文法言語地図』［2001］の解説編から、共通日本語の授受動詞の体系を引いて示そう（原文は横組み）。下の第三者の表現は、説明の都合上、私に添えたものである。

この表における受納動詞の遠心性動詞欄の空白は、授受表現のありかたからして当然の結果である。すなわち、話し手側は与え手としても受け手としても表現者になれるが、すでに向こう側にある相手を、さらに向こう側の存在たる

ヴォイス的対立	敬意の有無による対立	人称的方向性による対立		第三者の表現
		遠心性動詞	求心性動詞	
授与動詞（与え手が主格）	敬意あり	さしあげる	くださる	与える
	敬意なし	やる・あげる	くれる	
受納動詞（受け手が主格）	敬意あり		いただく	受ける
	敬意なし		もらう	

受け手としては表現できないからである。第三者による中立的表現なら、授与と受納の動詞は「与える－受ける」と一対一の関係になるが、境遇性の高い日本語はどうしても話し手が関与しやすい。しかも、物なり善意なりを受けた側が、それを自分の行為として表現するという構造である。かくて「敬意あり」の受納動詞「いただく」の用いられる機会の多いことは必然であった。本書はまた、遠心性授与動詞「やる」に相当する語にクレル系を用いる地域が、中部地方以東、九州南西部以南に分布することも指摘している。共通語とは逆の方向に用いるものである。ここにも「たまわる」「いただく」の誤用される契機があったと見るべきだろう。かくしてこの空白を埋めるように「いただく」が用いられたのだ、そうわたしは推察する。

さて、準口語ないし準文語の「たまわる」に対する口語「いただく」の謙譲語としての用法は、室町時代末期に生まれて江戸時代に発達した。そして「いただく」は「たまわる」の語義を現在まで引き継いでいるので、話者の側が対者からなんらかの利益か恩恵を受けることを表わす。補助動詞として用いられても同様である。それが今は商業敬語に濫用される。テレビの通信販売や料理の番組などで、行為者の誰彼を問わず動詞全部に「いただく」を付ける人もある。手藝の講師が「赤糸を二つ目の孔に通していただき、裏に回して両端を結んでいただきます。」などと言うのは、もう丁寧語に近い様相を呈している。現代の代表的な丁寧語「です」「ます」は、謙譲語「にて侍らふ（さも）」「参らす」が変化して成立したのだから、丁寧語化するのは一理ある変化だとは言える。だが、縷々書いてきたように、一方では「いただく」を尊敬語として用いる傾向が著しく進んでいる。丁寧語化と尊敬語化の同時進行と言うべきだろうか。日本語史のうえで謙譲語が体系として尊敬語に変化した例のあることを、わたしは知らない。

敬語の難しさについて発言する識者が多い。例えば、丸谷才一『日本語のために』（［1974］新潮社）の「敬語はむ

つかしい」。だがこれは困る。著名な文人の発言は影響力が大きいゆえに、特に慎重でなければならないのに、大衆に迎合するこの主張には百害あって半利もない。そもそも私見では、敬語が難しいというのは妄想に過ぎない。簡単な基本形式を理解し、なるべく助詞によって話者と行為者を明示する原則さえ習得すれば、誤用の契機はほとんど消滅する。井上史雄『敬語はこわくない』（1999）講談社現代新書）は、丸谷氏の著書に対峙しうる標題で、しかも簡潔な記述が好感できる。

以上、あれこれと見てきた「いただく」にまつわる日本語の現状である。敬語の簡素化は現代生活に好ましいはずなのだが、現実は濫用の進む傾向にある。しかも本稿で述べたような誤用が広がる原因として、日本人は、敬語使用の適否よりも、敬語を用いようとする心情を汲んで許し合っていることがあるのだと思う。優しすぎる日本人、これがわたしの脳裏に結ばれる日本人の自画像である。

（二千四年秋）

【付けたり】

〈先制〉余論

この時評の三・「スポーツ報道の現在」で、「～点を先制した」の不思議さを述べたところ、これは「～点を取って先制した」の縮約表現だろう、という趣旨の異見を頂戴した。その解釈をわたしは受け入れることができないが、それを否定しさることもできない。なぜなら、自覚的にこの表現をなすすべての人に対して、使用の意図を確かめなくては結論が下せないからである。そこで、掲載後に接したいくつかの実例を紹介して、読者に判断を委ねようと思う。

八月廿二日、オリンピックのソフトボール、日本対中国戦のテレビジョン放送。双方無得点で七回を終えてタイブレーカーに入り、八回表に日本チームが一点を取った。中国チームがその裏の攻撃に入るとき、アナウンサーは「先制した一点を守りきれるでしょうか」と言った。中国チームの攻撃は無得点でゲームが終わった。この時点でも「先制」という表現がふさわしいだろうか。

八月廿四日の宵のラジオで、オリンピックの野球放送、

日豪戦の一部を聞く機会があった。中盤三イニングほどの間に、解説者の小早川毅彦氏は「先取点」を、アナウンサーは「〜点を先制する」を、それぞれ二回用いた。そのゲームの結果を、翌朝七時のラジオのニュースでは「一点を先制され」と報じた。

九月十七日のラジオ第一放送で、プロ野球の近鉄対日本ハム戦の実況放送があった。午後六時二十五分ころから十五分ほどのあいだに、アナウンサーは「〜点を先行」を三回用いた。これも「〜点を取って先行した」の縮約表現といえるだろうか。

境界をどこに設けるかは難しい問題だが、せめてゲーム前半の得点でなくては「先制」にふさわしくない、というのがわたしの語感である。前稿に「先行」への言及はないが、「先行」は「先制」より使用できる幅が広いと思う。とはいえ、これも「先制」と同じく自動詞であって、「〜点を先行する」がおかしな日本語であることに変わりはない。